



# やかただより

広川町  
全戸配布

第103号  
令和元年5月

## 新時代「令和」が始まりました

先月号でお伝えしたとおり、4月1日に新しい元号「令和」が発表されました。これまでの改元は、今上天皇がお亡くなりになるという悲しい出来事と共に新元号が発表されましたので、お祝いムードではなかったです。今回は生前退位ですので、新しい時代を迎えるお祝いの雰囲気です。

平成時代は世界中で大きな災害が起りました。令和時代にはそういうことがない事を祈ります。しかし自然災害は仕方のない事でもあります。だから自分たちは、それに備えなければなりません。「稲むらの火の館」も防災の情報を発信し続けなければならないと、気持ちを締めめています。

ところで、平成30年度をまとめてみます。全来館者数は28,863人でした。その内、外国からのお客様は64カ国736人でした。この内、「世界津波の日・高校生サミット」で参加された高校生244名と引率49名の方々が一度に来られたということもあります。それでも過去最大の外国からの来館者ということです。



国内では、東日本大震災の被災地につくられる伝承施設等の参考にとということで視察に来られたり、津波防災の研究対象として見学に来館される方もおられます。これらの方々は、「稲むらの火の館」の展示の充実に関心されています。より一層、津波防災の情報発信に努めて参ります。

## 第11回稲むらの火講座を開催！！

今年度最初の「稲むらの火講座」を開催いたします。通算第11回目ということになります。



今回の講師を紹介いたします。藤本一雄先生は千葉県銚子市にある千葉科学大学危機管理学部危機管理学科教授で、防災工学、災害リスクマネジメントが専門の研究者です。これまでに、「危機管理教育の教材としてみた濱口梧

陵の功績とその再評価」という論文も発表されています。近年の濱口梧陵さんは、津波から村人を避難誘導して守った、更に広村堤防を築造して防災対策をしたということで評価されています。藤本先生は、それだけではなく、「銚子をコレラから守った」防疫、「広村崇義団の結成と広村稽古場の設立」は防衛ということでの危機管理という観点で、研究されています。津波防災だけではない濱口梧陵さんの幅の広い活躍を、お話をさせていただけるものと思います。

○日時 令和元年6月22日(土) 13時～

○場所 稲むらの火の館3階

○演題 「千葉県・銚子から見た

濱口梧陵と危機管理」

○講師プロフィール

1972年生まれ

1994年金沢大学工学部卒業

1996年東京工業大学大学院総合理工学

研究科社会開発工学専攻 修士課程修了

1999年東京工業大学大学院総合理工学研

究科人間環境システム専攻博士課程修了

○定員 90名(申込順とします)

参加申込は、稲むらの火の館

電話 0737-64-1760まで。

## 『安政聞録』 翻訳文 (その3)

原作・古田 詠処 養源寺蔵

## 三 回

さて、遅れて逃げた男女は、何とか二番波を免れ、今や三番目の津波が起ろうとした時、草履を脱いで波を踏み、田へ走り出そうとしたが、途中で次第に逃げる方角は見失い窮地に陥り、「このような場所で海の鬼となる(死んでいく)のか」という叫び声に呼応したように、たちまち火が燃え上がり、火が天に登ったように、四方が昼間のようになり、ここで気を励まして九死に一生を得、クモの子を散らすように、上へ上へと逃げていった。一体いま野に火を上げたのは誰かと尋ねると、この村の豪家・濱口儀兵衛、号を梧陵大人、性質は立派な男児で、時に三十数歳。特に情け深く知恵のある人物で、今回の地震はただ事ではないとかねてより覚悟を決め、村中を巡回し、人々を避難させ、二番波にも恐れずに寄せ来る波を東西南北へよけ、さらには後れて逃げ走る人。過ちがでることを恐れ、見回りしていたところ、黄昏に及び道がはっきりわからず、そのために知恵を出して野にて見つけた積藁に火を付け、多くの人々を助けたのであった。まことにその意志は尋常の人の及ぶところではない。まるで神か仏かと感激しない者はいなかった。まさに三番波が起らんとする様子がすさまじかったため、ここで濱口大人は、「いまになって残り死んでいく者は天命である、命がほしい者は早く逃げよ」と大声を上げながら、いよいよ大道の皆が着き、西のほうを見れば、既に翻っている火勢の高いこと、天王山のように、その火が回るのが迅速な様子は猛蛇が怒り進むかのようで、たちまち東南に広がり一体が白梅色となり、潮は煙が天を覆った。濱口大人もこの様子に驚き、一生懸命走ったが押し寄せる波の早いこと飛ぶ鳥のようであり、波に身が浸されること度々であった、しかし、(徳により運を得たのか)誤ることなくめいめい八幡の地に逃れ入った。勇しい事であった。この頃になり、宮山へ逃げ登る者もあり、あるいは法蔵寺、又は殿村へ、そのほか思い思いの高くて遠い所へ逃げたものは勿論助かり、運つたなく走り遅れた

者は、悲しいことに、海の魚となった。中にも不思議に命を拾った者もあり、末の回にくわし、それから又、夜になって津波が起きること四度に及び、都合七度、三番目の波が最も激しくまた高かった。高い木に登って助かった二人が言うのは、五番目の津波が非常に高かったという事である。

## 四 回

さて、前日から我慢していた者は、今日の大変ではじめて急ぎ慌てて荷物をはこぼうとし、できずに逃げようとしたが、目はるる道が遠く今更心を痛め、それぞれ苦しみ、その身を負傷する者少なくなかった。また老人や病気の親を持つ者は、捨てていくに忍びず、その身もろとも津波に流され死んでいく者もいた。これは「孝切の道」に死んだといえるが、互いにあたら命を無駄にする事であり、これも天命であるといえる。また前日からの危険を覚らずに死んでしまった者もいた。そのような人はみんなの意見を聞かず、地震津波をあなどったためである。「天は人を以ていわしむる」という昔の言葉は、大切に受け止めるべきである。(つづく)

\*\*\*\*\*

## &lt;南海トラフ地震対策&gt;

3月29日、政府は「南海トラフ地震」が発生する可能性が高まったと判断された際に自治体や企業が取るべき対応を示したガイドラインを公表した。南海トラフ地震の震源域でマグニチュード(M)8以上の地震が起きた場合、この地震に連動して起きる巨大地震で津波被害が予想される地域の沿岸に対し、避難勧告を発令することなどを求めた。政府は来月にも自治体向けの説明会を開き、来年度をめどに地域防災計画などに反映させる方針。

ガイドラインによると、気象庁は南海トラフ地震の「前震」と疑われる異常現象を観測した場合、5～30分程度で「南海トラフ地震臨時情報(調査中)」を発表する。専門家をつくる検討会が、巨大地震発生の可能性が普段より高まったと判断すれば、異常現象の発生から最短2時間程度で2回目の臨時情報を出して、政府が避難などの防災対応を呼び掛ける。

(備えの再確認、必要に応じて自主避難)

